The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	島津忠夫著作集以後の著述目録・補訂
Author(s)	島津, 忠夫
Citation	語文. 2019, 112, p. 57-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77204
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

島津忠夫著作集以後の著述目録・補訂

島　津　忠　夫

一、著述目録

島津忠夫著作集第十四巻『国文学の世界』（平成二十年、和泉書院刊）に平成十九年（二〇〇七）まで記載しているので、それ以後を、同じ形式で追加する。

平成二十年（二〇〇八）　八十二歳

一月　過眼秀歌抄「日本歌人」〔以下、平成二十八年九月まで毎号掲載。略〕
一月　歌集寸評「マグマ」〔以下、平成二十八年五月まで毎号掲載（平成二十七年九月号除く）。略〕
二月　島津忠夫著作集第十四巻『国文学の世界』（和泉書院刊）
二月　傍観者のひとりごと―句集『白富士』を読む―「天華」
四月　思い付くままに「能と狂言」6
六月　北海道に渡った連歌師卜純と中世北方史「語文」90〔著作集第十五巻『拾遺・索引』収録〕
九月　西山隆二先生―京大入学の頃―「京都大学国文学会会報」56
十月　思い出すことども（木村三四吾先生を偲ぶ）「ビブリア」130

十一月　総索引のこと―機械と手作業―「大阪大学国語国文学会会報」40
十二月　私の古典の一首「歌壇」

平成二十一年（二〇〇九）　八十三歳

三月　『五十冊の歌集　寸評』（国書サービス刊）
三月　現代短歌大賞を受けて―思わぬ受賞「現代短歌協会会報」118
三月　戦後短歌史―展示品出品解説を通して―（Ⅰ）「吐月峰」1
三月　長良川鉄道（短歌十首）「吐月峰」1
三月　島津忠夫著作集第十五巻『拾遺・索引』（和泉書院刊）
六月　鎌倉行（短歌十首）「源氏の会　おたより」198
九月　尾形仂の一書―『座の文学』―「俳句研究」秋の号
十月　中世芸能と文学（特集　中世芸能研究の視界）「国文学　解釈と鑑賞」74―10
十月　塚本明子歌集『星哭』批評―歌集という一つの作品「日本歌人」
十月　大東急記念文庫善本叢刊　中古中世編9『連歌Ⅱ』（汲古書院刊。責任編集、解題執筆）
十月　武家作法書覚書（特別寄稿）「かがみ」40
十月　心すべきことにこそ「大阪大学国語国文学会会報」41
十一月　自選歌十首『角川現代短歌集成』（角川学芸出版刊）
十一月　住高十一期と分れた時「大阪府立住吉高校11期会50周年記念誌」

平成二十二年（二〇一〇）　八十四歳

二月　与喜天神の連歌「與喜天満宮神社　社報」（創刊号）

三月　中原勇夫と私―会員が綴る思い出（28）（私の執筆の一回目）「ひのくに」〔以下、平成二十四年一月まで連載。略〕
三月　連歌史ところどころ（公開講演　講演録）「連歌俳諧研究」118
四月　神戸をめぐる昔と今（尾崎まゆみ歌集『明眉な闇』書評）「短歌現代」
四月　高砂の松と曽根の松「源氏の会　おたより」206
六月　庚寅の年（短歌十二首）「歌壇」
七月　老いの艶「マグマ」
九月　序（安田和子歌集『伊集の花』国書サービス刊）
十一月　西山宗因と八代「大阪大学国語国文学会会報」42
十二月　中世・近世和歌研究者必見の労作（日下幸男編『類題和歌集』和泉書院刊。推薦文）「いずみ通信　新刊の栞」26

平成二十三年（二〇一一）　八十五歳

一月　謡は俳諧の源氏（老のくりごと―八十以後国文学談儀―（1））「和泉書院ホームページ」〔以下、平成二十八年四月まで毎月掲載。略〕
一月　東氏旧宅の一夜（短歌十首）「吐月峰」2
一月　戦後短歌史―展示品出品解説を通して―（Ⅱ）「吐月峰」2
三月　東氏と古今伝授『郡上学3』（郡上市刊）
三月　戦後十年を代表する　秀歌7首＋鑑賞（特集　戦後短歌の出発）「短歌現代」
四月　安心して読める麗筆（尾崎左永子著『王朝文学の楽しみ』書評）「短歌新聞」690
五月　綿屋文庫と連歌―『向栄庵記』のことなど―（講演）「ビブリア」135
六月　追悼歌のかたち「日本歌人」
六月　宗因と正方―続貂―「上方文藝研究」8
七月　島津忠夫著作集別巻『宗祇の顔　画像の種類と変遷』（和泉書院刊）

八月　川西といふ町（短歌七首）「短歌現代」
八月　五七五　七七（8月の題　かえる）（短歌五首）「読売新聞」（三十一日夕刊）
十月　文語と口語（今月の視点）「短歌往来」
十月　遠い昔のこととなってしまった話『平成の連歌　第二集』（今井祇園連歌の会刊）
十一月　和泉書院のホームページ「大阪大学国語国文学会会報」43
十一月　連歌は今（「今月の秀歌」）「短歌新聞」697

平成二十四年（二〇一二）　八十六歳

三月　『源氏物語』論余滴　一「源氏の会　おたより」226〔以下、「三一」までを、263号までにとびとびに掲載。略〕
四月　平野法楽連―「過去と現在」から「過去から未来」へ・ほか『平野法楽連歌　過去から未来へ』（杭全神社編、和泉書院刊）
四月　はじめに（『歌仙　絆』）
六月　巻頭歌・源氏物語と私「花簪り」（源氏の会四十周年記念文集）
六月　中世文学としての能（伊藤正義『中世文華論集　第一巻　謡と能の世界（上）』和泉書院刊。推薦文）
七月　ほら貝（七月のうた）（短歌三首）「なごや文化情報」
七月　大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇10『諸芸Ⅰ』（汲古書院刊。責任編集）
八月　母を憶ふ（8月集）（短歌十二首）「日本歌人」
十一月　若山牧水を追って「大阪大学国語国文学会会報」44
十一月　『国文の碩学　歌人中原勇夫の周辺　門人たちが語り継ぐ「常歌」の世界』（小嶌一郎ほかと共著、ひのくに短歌会刊。「帯文」、「第二部　中原勇夫と私」のうち28～48執筆）
十一月　跋　風狂と調べ―『草伽藍』に寄せて（佐藤光子歌集『草伽藍』不識書院刊）

平成二十五年（二〇一三）　八十七歳

二月　アララギ歌人に寄せる愛情（書評。大島史洋著『アララギの人々』角川学芸出版刊）「短歌往来」
二月　源氏香（筒井紅舟編『連歌集　竹林の風』右文書院刊）
四月　『西山宗因全集　第五巻　伝記・研究篇』（八木書店刊。監修・編集、宗因伝書執筆）
五月　赤城友規さんの遺歌集に寄せて（赤城友規遺歌集『梔子の青きばかりに』）
五月　新出の綿屋文庫蔵宗祇画像をめぐって「ビブリア」139
五月　待望の全集―甦る文人僧蝶夢―（田中道雄・田坂英俊・中森康之編著『蝶夢全集』和泉書院刊）
八月　『鹿陽和歌集』の翻刻に寄せて（松尾和義編著『鹿島家鹿陽和歌集　翻刻と解題』和泉書院刊）
八月　雨もよひ（もったいな語辞典）「読売新聞」（二十三日夕刊）
九月　島津忠夫著作集別巻2『若山牧水ところどころ　近代短歌史の視点から』（和泉書院刊）
十月　大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇11『諸芸Ⅱ』（汲古書院刊。責任編集、「武家諸作法抜書」総説・第十冊解説執筆）
十月　松坂行「大阪大学国語国文学会会報」45
十二月　西山宗因と伊勢松坂「語文」100・101（大阪大学国語国文学会編）

平成二十六年（二〇一四）〔四月　郡上大和で米寿祝。九月　大腸癌発覚。十月　所沢の防衛医大病院で手術。十二月　転移性肝臓がん、所沢の明生病院で手術〕　八十八歳

八月　世阿弥能作と和歌―〈融〉を中心に―（特集　世阿弥をめぐる和歌・連歌の世界）「能と狂言」12
九月　風雅な生活の中から（書評・筒井紅舟歌集『匂ひぬる』）「短歌往来」
九月　芭蕉展によせて（図録『柿衛文庫開館三〇周年・芭蕉生誕三七〇年記念　芭蕉　三〇年間の新出作品を中心に』柿衛文庫刊）
九月　宗祇『当年之発句』（滋賀県正厳寺蔵）（竹島一希と共同執筆）「連歌俳諧研究」127
九月　余りにも私的な回顧「住中十八期二十三回会合報告」25
十月　『伊勢三吟』に寄せて―連歌復興の兆し―（今井欣子・喜多さかえ・鶴崎裕雄共著『連歌集　伊勢三吟』和泉書院刊）

十月　東下りのあらまし「大阪大学国語国文学会会報」46
十一月　小島頓宮法楽連歌と二条良基の『小島のすさび』（『小島頓宮法楽連歌会　二十周年記念誌』小島頓宮法楽連歌会〔瑞巌寺法楽連歌会〕刊）
十二月　人魚のこころ（西田泰枝歌集『灯りをさがす』批評特集）「青天」
十二月　『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー刊　監修。女歌・狂歌・教訓歌・実業・集外三十六歌仙・宗長日記・為広下向記・定型・所々返答・ひとりごと執筆）

平成二十七年（二〇一五）〔所沢の佐貴子の所で越年。二月　川西にもどる。七月　再発。八月　所沢のマンションに転居。十一月　腸閉塞で防衛医大病院入院。十二月　退院、在宅医療となる〕　八十九歳

二月　閻魔王の顔（短歌十二首）「日本歌人」
二月　『心敬十体和歌　評釈と研究』（監修・共著、和泉書院刊。序、評釈編〈共同研究〉、『心敬十体和歌』の成立と諸本執筆）
三月　愛知県内の諸文庫と私の思い出（『愛知県史　別編　文化財4　典籍』月報「愛知県史のしおり」）
四月　『源氏物語』の贈答歌（特集・古典とつきあう方法―この一冊、あるいは無用論）「短歌研究」
五月　この年は（作品）（短歌十二首）「歌壇」
六月　袖振草（最近知った古語・新語）「現代歌人協会会報」143
七月　西山宗因との出合い（「リレーエッセイ　私の研究履歴」）「雅俗」14
十月　近況「大阪大学国語国文学会会報」47
十一月　新居の独り暮らし（11月集）（短歌八首）「日本歌人」
十二月　たまきはる（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」

平成二十八年（二〇一六）〔四月十六日　逝去。享年八十九歳〕

一月　眠られぬままに（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」
二月　せせらぎ街道（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」
二月　入院中の日々（特別作品）（短歌二十首）「短歌研究」
三月　無常（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」
四月　いつか来た道（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」
四月　『連歌大観』を推す（『連歌大観』内容見本・推薦文）
五月　天女の舞（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」
六月　日記歌なれど（風葉集）（短歌八首）「日本歌人」
六月　『甲子庵文庫蔵　紹巴冨士見道記　影印・翻刻・研究』（大村敦子氏と共編著。和泉書院刊）
六月　幻の宗祇画像―柿衞文庫蔵「家蔵種玉庵禅師影之記」の一紙をめぐって―「上方文藝研究」13

平成二十九年（二〇一七）

四月　『西山宗因全集　第六巻　解題・索引篇』（八木書店刊。監修・編集、資料解題執筆）
四月　島津忠夫著作集別巻3『『源氏物語』放談　どのようにして書かれていったのか』（和泉書院刊）
九月　島津忠夫著作集別巻4『老のくりごと　八十以後国文学談儀』（和泉書院刊）

平成三十年（二〇一八）十二月三十一日現在未刊行

平成二十二年十月執筆　短歌世界の視覚化とは（「歌となる言葉とかたち」シンポジウム基調講演　講演録）
平成二十四年二月執筆　伊藤正義氏の能楽研究（伊藤正義『中世文華論集　第五巻　中世文華とその資料（上）』和泉書院刊。月報）
平成二十七年二月執筆　大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇17『美術』（汲古書院刊。宗祇像執筆）

二、補訂

第一巻

目次　「二十八　評論の文学―無常といふこと―」→「二十八　評論の文学―無常といふ事―」。

一三二頁のあとに、「付記」を加える。

平成二十一年五月十六日、早稲田大学で行なわれた日本近世文学会に出席して、「近世文藝の輝き―早稲田大学所蔵　近世貴重書展」を見る。実に充実した展覧会に感心して見ていたが、ふと展示の裏にパネルがあり、「初櫓噂高嶋」（はつやぐらうわさのたかしま）の錦絵が目にとまった。解説では、

二代目豊国画
三代目岩井粂三郎のおぜう吉三
四代目市川小団次のおしやう吉三
初代河原崎権十郎おぼう吉三
安政七年（一八六〇）一月　東京市村座
「三人吉三廓初買」（〇〇六―〇〇〇八―〇〇〇九）

と記されているように、まさしく初演の折の役者絵である。

三九〇頁十五行目　『新編国歌大観　私家集編』→『新編国歌大観　私撰集編』。
三九七頁十八行目　「伊弉諾伊弉冉」→「伊弉諾伊弉冉尊」。
三九八頁十四行目　「〔種類〕それぞれの国々の文学史」→「〔種類〕まずそれぞれの国々の文学史」。
四〇一頁十七行目　「深いかかわりをもっていると推測される」→「深いかかわりをもっているものと推測される」。
四〇三頁　一行目　「遠巻きの徒然に」→「遠巻きの徒然さに」。
四〇五頁十一行目　「独特の風格をもっている」→「独特の風格をそなえている」。

第二巻

口絵

「宗祇短冊　長門一之宮住吉神社蔵（八八頁参照）」として掲載の短冊の写真は、予期した「松かぜやけふも神世の秋のこえ」ではない。尾崎千佳氏より質問を受けて気が付いたが、これは『連歌の研究』の折の誤りを踏襲してしまったものであった。助成金の関係もあって『連歌の研究』の刊行を急いだので、以前実見したものをお宮に許可を申請し、送られて来た写真を、そのまま掲載したが、それは別の宗祇短冊であった。尾崎氏が訪れて実見された時は、「松かぜや」の短冊は、傷んでいてとても口絵写真には無理な状態だったとのことで、「折ふしはすむ若竹の小舎哉」の方を送られたのではなかったかと思われるが、これはもともと神社に伝わったものではなく、昭和十九年頃寄贈されたものとのことである。宗祇の句集には見えず、果して宗祇筆かも疑問である。

二八七頁　七行目　「岩波文庫『連歌論集』」→「岩波文庫『連歌論集　上』」。
三七七頁十七行目　『田山方南華甲記念論文集』→『田山方南先生華甲記念論文集』。
四二一頁　一行目　「城闇」→「城闇」。

第三巻

一四頁十八行目　『折口信夫全集』→『折口信夫全集　9』。
七四頁十八行目　「貴重図書本刊行会」→「貴重図書刊行会本」。
九二頁十四行目　「宗祇短歌以後」→「『宗祇短歌』以後」。
一七三頁　三行目　『京都大学蔵貴重連歌資料集』→『京都大学蔵貴重連歌資料集』。
一九三頁　十行目　「昭和二十六年九月」→「昭和二十六年八月」。
二三〇頁　三行目　『京都大学蔵貴重連歌資料集』→『京都大学蔵貴重連歌資料集』。
二六八頁十九行目　『紹巴発句集』→『紹巴発句帳』。
二八八頁　五行目　『稲莚』→『稲筵』。

第四巻

一五頁十五行目　『北野社一万句発句脇第三并序』→『北野社一万句御発句脇第三并序』。
五一頁　七行目　『新編国歌大観』→『新編国歌大観　私家集編Ⅳ』。
五六頁　二行目　『心敬有伯へ返事』→『心敬有伯への返事』。
一〇二頁　九行目　『十体和歌』→『十躰和歌』。
一一二頁　六行目　『心敬有伯への返書』→『心敬有伯への返事』。
一三七頁十三行目　『心敬僧都十体和歌』→『心敬僧都十躰和歌』。
二五〇頁十一行目　「十四日、木屋瀬で筑前守護代陶中務少輔弘詮の館に至り、傍らの禅院にて泊」のあとに、以下の注を加える。

「十五日、弘詮の館で一座。宴遊。『筑紫道記』に見える十四日の「草の枕」の夢の告げの記事は金子金治郎氏の虚構と見る説（『宗祇の生活と作品』昭和五十八年、桜楓社刊）によれば、禅院にて二泊ということになる」と記したが、有川宜博氏「『筑紫道記』にみる宗祇の旅―連歌師がたどった足跡―」（「西日本文化」441、平成二十一年十月）によれば、筑前守護代陶弘詮の館は、木屋瀬ではなく、木屋瀬から飯塚に至る遠賀川沿いの草場（福岡県鞍手郡小竹町）にあったとする。「広く見よ民の草葉の秋の花」の宗祇の発句には、従来から言われている「広」（弘）と「秋」（詮）をよみ込んだほかに、さらに「草葉」に地名の「草場」を詠み込んでいるとする。とすれば、宗祇の行程は、十四日、木屋瀬泊。十五日、陶弘詮館の傍らの禅院で泊ということになる。陶弘詮の館が草場にあったとすることが、もう少し傍証がほしいが、有力な一説だと思う。

三〇一頁　表の作品番号12のあとに、加える。

年次	作品名	基佐	宗祇	宗長	兼載	肖柏	宗伊	宗砌	能阿	親当	玄清	恵俊	泰諶	一覚	寿慶	発句	その他の主な連衆
延徳4・3・19（一四九二）	山何	○	○		○						○	○		○		花ぞ散（兼載）	尊皓・弥阿・宗覚・仏覚・領重・但阿

鶴崎裕雄「基佐と宗祇・兼載ほか同座連歌の新資料―京都府八幡市ふるさと学習館所蔵「賦山何連歌」（「連歌俳諧研究」116、平成二十一年三月）

三四一頁　一行目　『校本芭蕉全集』→『校本芭蕉全集　第一巻』。
三八九頁　二行目　『手尓波大槻抄之抄』→『手尓波大概抄之抄』。

三八九頁　十行目　「定稿本成る」→「誤り。長谷川千尋「宗祇『自讃歌』の姿」（「国語国文」平成二十六年十月）参照」。
四〇〇頁十二行目　「『何路百韻』」のあとに、加える。
柿衞文庫宗祇自筆。宗祇が正種に献上した懐紙。

第五巻

三三五頁十九行目　『立圃・長興俳諧両吟千句』→『立圃長興両吟俳諧千句』。

第六巻

三四頁　四行目　「横田」→「横山」。
一一七頁十八行目　『京都大学蔵貴重連歌史料集』→『京都大学蔵貴重連歌資料集』。
一三八頁　一行目　『淀渡』→『淀の渡』。
一八一頁十七行目　「信闇」→「信闇」。
一八二頁　十行目　「信闇」→「信闇」。

第七巻

四五頁　七行目　「平成五年」→「平成六年」。
一一九頁　七行目
久保木秀夫氏の論考は、『中古中世散佚歌集研究』（平成二十一年、青簡舎刊）第一章第一節に収められている。これは、『大鏡』『拾遺和歌集』さらには『源氏物語』の成立にもかかわる問題である。
一二五頁付記の一行目を、次に改める。
「短歌」平成五年八月号に同題で記したものに、注を加え、『和歌文学史の研究　和歌編』に収めた。ここにもほぼそのまま収めた。
一六五頁　文末に、加える。

田中登氏「伝二条為明筆六半切拾遺集の性格」（『国文学』〈関西大学〉93、平成二十一年三月）この切が、多久本・観喜光寺本に近いよし。

二四三頁二十行目　『太皇太后宮亮平経盛家歌合』→『太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合』。

四〇二頁　一行目　『鳥帯千載集時代和歌の研究』→『鳥帯　千載集時代和歌の研究』。

四六六頁　六行目　「定家歌論の考察―近代秀歌―」→「定家歌論の一考察―近代秀歌をめぐって―」。

第八巻

一二〇頁九行目のあとに、以下の注を加える。

この部分は、もっぱら福田秀一氏の「阿仏尼論」（『中世和歌史の研究』所収）によって記した「阿仏尼―意志と才気―」（『国文学　解釈と教材の研究』）の旧稿にそのまま拠り、本著作集に収録するにあたって改めて考証を加えなかったのであるが、田渕句美子氏『阿仏尼』（〈人物叢書〉平成二十一年、吉川弘文館刊）に拠れば、その後、このあたりの研究は大きく進展していて、訂正を加えるべき点は多い。『うたたね』は、「自分を主人公として朧化と虚構を加え、全体を物語的に構築した」作品で、『源承和歌口伝』に語る阿仏尼の伝の方が信憑性が高いこと、平度繁も『うたたね』にいう「のちの親」（養父）ではなく、実父と見るべきだということである。

一七二頁十六行目

徳川黎明会叢書『和歌編四　桐火桶・詠歌一躰・綺語抄』→徳川黎明会叢書和歌編四『桐火桶・詠歌一躰・綺語抄』。

二〇七頁十九行目　「憲実女」→「教家女」。

二一三頁十一行目　「度会信誠」→「度会延誠」。

二六六頁　二行目　『定家仮名遣』（『国語学大系』所収本奥書）のあとに、以下の注を加える。

『国語学大系』には、常縁の奥書は見られなかったが、佐賀県立図書館鍋島文庫蔵『仮名文字遣』（大本一冊、寛政四年六月、山領主馬平利昌写）に、次の奥書がある。

文安五年二月廿三日書之。

此双子以証本不違一字書写之。依左衛門尉藤原氏保所望径年月者也。真実早筆之躰多憚。

平常縁（花押）

此本書者和州郡山松平甲州公之御伝来也。尤御家に野州御直筆有之候也。

元文第三八月日　　梅月堂居士平景新（花押）

（以下略。詳しい山領利昌の書写奥書がある）。

この奥書に見える藤原氏保は鷲見氏で、郡上の鷲見城（岐阜県郡上市高鷲町）に拠った中世の武将であって、常縁とは親交があったことが知られ、その常縁筆の本が、元文三年まで、大和郡山の松平侯のもとに伝存していたことが知られる。

第九巻

一一七頁　六行目　「潜勢力」→「潜勢力」。

一四三頁　五行目　『近代短歌論争史　明治大正篇』→『近代短歌論争史　明治大正編』。

一六六頁　六行目　「近藤芳美（一九一三―）」→「近藤芳美（一九一三―二〇〇六）」。

一六六頁十六行目　「加藤克巳（一九一五―）」→「加藤克巳（一九一五―二〇一〇）」。

一七一頁十二行目　「安永蕗子（一九二〇―）」→「安永蕗子（一九二〇―二〇一二）」。

一九三頁　十行目　「早野二郎〔夏衛〕」→「早野二郎」。

二三一頁二十行目　『短歌』→「短歌」。

二六五頁　九行目　『折口信夫全集』→『折口信夫全集　第二十五巻』。

第十巻

一二一頁　二行目　大江山について

「香取本に大江山とあるのだから、大江山が古形であることはいうまでもない」としか記していないが、和田嘉寿男氏「大江山考―酒呑童子と元伊勢―」（「本」平成三年十二月）に、大江山に近い元伊勢という地に注目されていることを注記しておきたい。

一三七頁　文末に、加える。

安藤秀幸「『酒呑童子』諸本論再考」（「国語国文」平成二十七年九月）。

三一三頁十四行目　『平家物語全注釈』（昭和四十二年、角川書店刊）→『平家物語全注釈　下巻』。

三三九頁　四行目　「朝日寺」に、以下の注を加える。

「夜明山朝日禅寺」。チョウニチゼンジと読む。平成二十一年十一月二十一日に訪れ、平安・鎌倉期の観音像三体を収める観音堂および、像内背部の墨書銘によると嘉元二年製作の神子栄尊像をま近に拝することが出来た。とくに、神子栄尊像は帽子を被った姿で、冬季は帽子を着せるとのこと。見るからに鎌倉の作と思われる像であった。この大善寺町夜明は、筑後川を挟んで対岸の下野とも近く、この筑後川下流域の安徳天皇伝説がつながりを持っていることを改めて感じた。

四〇六頁　十行目　『小城鍋島文庫本平家物語　解題』→『小城鍋島文庫本平家物語』解題。

四五五頁　六行目　「原田竜平氏」→「原田龍平氏」。

第十一巻

一五七頁十八行目　「長禄三年（一四五九）八月七日の独吟『三字中略四字下略百韻』一巻が肥前島原松平文庫に現存しているが」の、「下略」は「上下略」の誤りと思われるが、この懐紙が『肥前島原松平文庫目録』に見えない。何によって記したのか不明。

二〇〇頁　五行目　「比奈能都夜故尓」→「比奈能夜都故尓」。

二四三頁　三行目　「世阿弥周辺の曲」のあとに、「三十四年能組で十郎が演じている」を加える。

二四五頁　四行目　「作られた可能性は高いとする」のあとに、「三十四年能組で元重が所演」を加える。

二六三頁　八行目　『平家物語全注釈』→『平家物語全注釈　上巻』。

三〇七頁十五行目　付記のあとに、加える。

なお、〈松風村雨〉の〈汐汲〉からの改作に、観阿弥の改作が介在したのではなく、観阿弥は『五音』に「亡父曲」と見える〔サシ〕と〔下ゲ歌〕〔上ゲ歌〕の部分のみであったことが、竹本幹夫氏「『三道』の改作例曲をめぐる諸問題」（「実践国文学」19、昭和五十六年三月。『観阿弥・世阿弥時代の能楽』平成十一年、明治書院刊所収）に早く記されていた。

三三三頁　六行目　『古代中世芸術論集』→『古代中世芸術論』。

三四〇頁十六行目　注（5）に「未詳」としているが、「山階弥右衛門元直」と考えてよいのではないか。
六三七頁　十行目　「〈芸文・著作権室〉作。」→「〈芸文・著作権作〉。」。
六九六頁十六行目　「簑助さん」→「蓑助さん」。
七一四頁上段　六行目　「○猿之助」のあと、「→猿翁（二世）平24」を加える。
七一四頁下段　一行目　「○亀治郎　市川　二世（昭58）」のあと、「→猿之助（四世）平24」を加える。
七一五頁上段　三行目　「○勘三郎」の末尾、「平24没（57）」を加え、○を削除。
七一五頁上段　十三行目　「○冠十郎」の末尾、「平20没（82）」を加え、○を削除。
七一六頁中段　四行目　「○吉之丞」の末尾、「平26没（81）」を加え、○を削除。
七一七頁下段　十九行目　「○芝翫」の末尾、「平23没（83）」を加え、○を削除。
七一八頁上段　十三行目　「○雀右衛門」の末尾、「平24没（91）」を加え、○を削除。
七二〇頁上段二十二行目　「○團十郎」の末尾、「平25没（66）」を加え、○を削除。
七二一頁中段　十五行目　「○富十郎」の末尾、「平23没（81）」を加え、○を削除。
七二二頁中段　十五行目　「箱登羅」の末尾、「平22没（79）」を加える。
七二二頁中段二十一行目　「○半四郎」の末尾、「平23没（84）」を加え、○を削除。
七二三頁上段　十九行目　「○又五郎」の末尾、「平21没（94）」を加え、○を削除。
七二三頁下段　三行目　「○三津五郎」の末尾、「平27没（59）」を加え、○を削除。
七二四頁上段　十九行目　「○吉五郎」の末尾、「平22没（92）」を加え、○を削除。
七二四頁中段　十四行目　「○芦燕」の末尾、「平23没（85）」を加え、○を削除。
七二五頁上段　十三行目　「○伊達大夫」の末尾、「平20没（79）」を加え、○を削除。
七二六頁中段　一行目　「○清之助」のあと、「豊松清十郎（平20）」を加え、○を削除。
七二七頁下段　三行目　「春日野八千代　昭3～○」→「春日野八千代　昭3～平24」。

二二三頁　四行目　『却来花』→『却来華』。
四二八頁　八行目　「かつて詩人の大西美千代と二人で同人誌「詩線」を出していた」について。
水谷澄子氏より「詩線」一号のコピーを送られ、それには、黒田百合子との三人による同人誌として出発したことを知る。なお一時期松平盟子が加わっていたこともあった。
四七三頁　九行目　「平成八年〈一九九六〉」→「平成九年〈一九九七〉」。

第十三巻
一六七頁十九行目　「金春八条」→「金春八丈」。
二六一頁二十行目　「昭和七年（一九三二）卒。」→「昭和七年（一九三二）卒業。」。

第十四巻
一九一頁十三行目　「明石の浦に着く」のあとに、加える。
『宗因発句帳』に、「作州下向之時、道中淡路島」として「国なせる新島や是霧の海」の句がある。
二四〇頁上段　三行目　「江戸堀本通」→「江戸堀下通」。
二四七頁上段十六行目　「大阪高等学校」→「浪速高等学校」。
二九九頁下段十七行目　「平成十三年（二〇〇一）」に、「日本文藝家協会入会」を加える。
三七〇頁下段二行目に、加える。
『頭注徒然草』（関書院刊）　四月
四三一頁上段　八行目　「国語表現法」のあと、「〔演習〕」を加える。

第十五巻
四五頁　十行目　「深浦に渡るには、潮流の上から考えても、〔松前からよりも〕上ノ国からの方が容易ではないかと思われる」のあとに、以下の注を加える。

斉藤利男氏より、「上ノ国の位置から考えてどんなものかと思いました。松前の漁師たちは、本州に渡るのに、権現崎（小泊）の沖をめざして出航すると潮流との関係で、ちょうどいいところにつけるということを聞いています」と指摘を受けた。そういえば、このことは、松前を実地調査した時、永田富智氏よりも聞いたことであった。やはり上ノ国への実地踏査を経た上で確かめるべきだった。

五〇頁十六行目　注（6）のあとに加える。

「卜純の名前が『卜純句集』以外に見える唯一の例」としているが、早く井上宗雄氏『中世歌壇史の研究　室町後期』（昭和四十七年、明治書院刊）に、

・秋田県立本「六家集」は部類されているが、奥に「近年於夢庵閑窓抄之、永正癸酉〔十年〕初冬之候卜純写之間加筆耳　牡丹花判」とある。

・古聞京大本には更に永正八年から十一年にかけて珠念・卜純らが伝え、泉・河で一覧・加筆した奥書があり、

とあるのを失念していた。いずれも、卜純が道南・北奥羽の旅から帰京した後のことになる。

このことは、竹島一希氏の教示による。その後、竹島氏「卜純追考」（「会報大阪俳文学研究会」45、平成二十三年十月）に、その他の関係資料を紹介して卜純について考察されている。京大本『古聞』の検討から、滋岡長松の『連歌士時代考草稿』に見える「卜純（宗祇同時。肥前人。永正九年十二月十四日ヨリ、為卜純肖柏老人古今集ヲヨム事あり）」の記述が根拠のあること、『元長卿記』永正十年四月八日条に、元長邸での連歌に、宗碩・殊全（珠全）・周桂らとともに招かれていることとともに、早くから気になっていた『卜純句集』の前句から他の連歌師の句が判明しないかと思っていたが、それを精査し、『春夢草』（書陵部本）、『下草』（龍谷大学本）から、肖柏・宗祇との同座を指摘され、とくに龍谷大学本『下草』が第一類で、延徳三年には、上洛しているのではないかとする。また、『大発句帳』の「於周防紹周」の前書を持つ「春のよや月のかつらのはなぐもり」の句が、『大発句帳』では「同」とあって、玄仍の句となるが、大阪天満宮蔵『雑記』六番（れ一五―二六）に書き留められている年次未詳の千句の発句から、卜純の千句における発句と認められるとする。これらの点から、「恐らく、卜純は最初は宗祇門であったが、宗祇の死とともに、宗祇高弟の肖柏門へと移ったのであろう。そして、宗祇門の兄弟子であった南部信義（梅仙）の訃報を聞き、その追善に宗祇門を代表して赴いたのではなかったか。そこには卜純の力量を知る肖柏の後押しも想像できるのである。」という結論を導いている。

九四頁一行目　本文のあとに、以下の文を加える。

平成二十一年十一月二十一日、米田真理子氏が栄西の茶の遺跡を検証したいとのことで、松本正光・森四郎・志藤肇子諸氏の車による案内で、背振山中宮霊山寺跡遺跡を探訪することができた。以前と違って、神埼から那珂川へ車道が通じており、その途中から山道に入れば、霊山寺跡入口まで車で行くことが出来、そこより歩いて、霊水石・水上坊跡を見て、乙護法堂まで達することができる。お茶の記念碑も立てられていた。それより栄西のいたという西谷の石上坊跡までは、米田・松本・森氏が出向いたが、これはかなり大変な道であったようだ。

一三六頁六行目　削除（四二〇頁十五行目「城闇」→「城闇」）。
二〇三頁第二段　二十行目「城闇　②420 421 ⑮136」→「城闇　②420 421」。
二〇五頁第四段二十一行目「信闇（大鳥居）　⑥182」→「信闇　⑥181 182」。
二三〇頁第四段　二行目「早崎夏衛　192 193 198 199 208 221」→「早崎夏衛　192 198 199 208」。
十五行目「早野二郎→早崎夏衛」→「早野二郎193 221」。
十六行目「早野臺気→早崎夏衛」→「早野臺気→早野二郎」。

〔平成二十三年十月十九日現在。以下追加〕

島津忠夫先生が亡くなって三年が経った。

本稿「島津忠夫著作集以後の著述目録・補訂」は、島津忠夫先生が作成されていた原稿を、ご生前の指示に従い、尾崎千佳と米田真理子が校訂して、公表するものである。冒頭にもあるように、『島津忠夫著作集』第一巻～第十四巻（平成十五年〈二〇〇三〉～平成二十一年〈二〇〇八〉、和泉書院。以下『著作集』）以後の著述目録と、『著作集』全十五巻（平成二十一年〈二〇〇九〉完結）の補訂を、原則として『著作集』と同じ形式で掲載する。

「一、著述目録」は、先生ご自身が作成されていた目録に、先生の日記や手控えなどから見出された著述を追加したものである。それら著述の一点ずつを、尾崎と米田が、岐阜県郡上市の古今伝授の里フィールドミュージアム短歌図書館大和文庫や島津忠夫文庫（郡上市役所大和庁舎）ほかで確認して、修正を加えた。収録した著述は、『著作集』第十四巻第六章「著述目録」の「補記」に、「著書、論

文、書評・紹介、序跋、短歌評論、随想・雑筆」とあるのに准じ、「「言霊」「しきなみ」「ひのくに」「マグマ」掲載の短歌は省略する」とあるのも同様にした。ただし、「言霊」「しきなみ」「ひのくに」への投稿は、平成二十年（二〇〇八）以降は無かった模様である。また、先生の日記には講演などの記録もあったが、割愛した。

「二、補訂」は、『著作集』第十五巻「補訂（第一巻―第十四巻）」以後の拾遺である。『著作集』各巻の刊行後、諸氏からの指摘や先生ご自身が気づかれた修正点を、その都度、『著作集』各巻に書き込まれ、第十五巻に「補訂」と題して発表された。第十五巻刊行後も、修正点の書き入れは続けられ、さらに、平成二十三年十月十九日までの「補訂」を、ワープロで作成されてもいた。尾崎と米田が、『著作集』への書き入れとワープロデータを照合したところ、かなりの点数が未入力であることがわかった。そこで、『著作集』のすべての書き入れから、第十五巻「補訂」に掲載されていないものを抜き出し、ワープロデータ「補訂」に追加した。先生の「補訂」データを修正した箇所と、我々が追加した補訂も含まれる。なお、文末の「〔平成二十三年十月十九日現在。以下追加〕」は、先生ご自身が記されたメモである。

先生の原稿およびデータは、ご遺族からご提供いただいた。また、日記や手控えからの著述の抜き出しや、『著作集』の書き入れの確認は、娘婿の藤森昭氏の手を煩わせた。ご遺族ならびに調査にご協力くださった方々に感謝申しあげます。